

日刊建設工業新聞

発行所 ©日刊建設工業新聞社 2012 〒105-0021 東京都港区東新橋2-2-10 電話03(3433)7151 URL:http://www.decn.co.jp/

2012年(平成24年)10月24日(水曜日) (10)

新築無二無三日



竹林 征三

富士常葉大学名誉教授
山口大学時間学研究所客員教授

これまで、洪水災害や火山災害等に備え、避難等に役立てようとハザード・マップが作られてきた。洪水災害に備えたハザード・マップは、堤防改修が遅れた場所や洪水疎通能力の小さい場所が決壊した場合、どのように堤内地に洪水流が押し寄せ、浸水深が何処何処になるというところをシミュレーションし、地図に各地点ごとの浸水深を色分けで表示するものであった。

要は、沖積平野の地形図の位置の標高差の1次元情報のみを考慮したものがハザード・マップと称されて

きた。確かに、これまでの河川の洪水に対しては第一義的役割を果たす大切な情報図となる。

今回、東日本大震災を振り返る時、これから求めら

風土・文化の発する多次元ハザード・マップ

れている河川災害のハザード・マップはいかにあるべきかを考えてみよう。

大震災を受けて河川堤防は多くの個所で壊滅的に破壊された。その原因を見ると、堤防位置がかつての旧

河道や埋立部の個所では基礎地盤の液化化により破壊している。また、震災後、沖積地では1府近くも沈下したところも多い。

次の洪水期までに恒久的

いう1次元の地図情報のみを表示しているハザード・マップには限界がある。

東日本大震災からの教訓を踏まえて、今求められているハザード・マップとは何か。私はこれまで風土工学を提唱し、風土が語りかける多次元な災害の宿命を表示した風土工学・ハザード・マップを作成すべきだと訴えてきた。

人間が社会活動をしてき

形図が作成されてからも、河道が大幅に何度も変わっている河川も少なくない。

それ以前の江戸時代の古地図と比較すれば、河道変更は驚くばかりである。それらの河川氾濫の歴史とそれに対しより安全な国土にするべく、我々の先人が営々と行ってきた治水の営みの結果、現在の河道がある。計画想定以上の大出水

が生起すれば、元の河筋に戻りたいという河川の遺伝子のようなものを感じる。

さらには、私たち、先人は後世の人々に災害の宿命を伝えるべく多くの石碑や石造物を造ってきた。それらの石碑に刻された碑文を

読む時、後世の私たちに二度と同じような被害に遭遇しないほしいとの先人の熱きメッセージに圧倒され

る。碑文は戦前のものはほとんど漢文で書かれている。もとはしない。嘆かわしいことである。

現代の私たちは祖父や曾祖父が伝えていた伝言を讀もうとはしない。嘆かわしいことである。

歴史だけではなく、災害の宿命を伝えていた民話・伝説も多くある。民話・伝説などは先人が勝手に作った昔話で史実ではないので、価値がないと切り捨ててきたところがある。

権力者や勝者は書物という書き物で歴史を残すことが出来るが、敗者は堂々と書き物を残すことが出来なかった。名もなき人々や敗者は民話・伝説という形で多くのメッセージを後世の私たちに伝えている。それらの中には歴史書以上に価値が高い、災害の宿命を伝えていたものも少なくない。

東日本大震災は私たちに風土工学ハザード・マップの重要性を知らずも教えてくれることとなった。

所
論
諸
論